

江西一三とその時代 (31完)

向 井 孝

△前置き▽ この連載はあと三回ほど続くものとして予定していたが、江西さんの了承をえたので、今号でまとめてしまいたいとおもう。

何分にも発表が三・四ヶ月毎という間遠しさであるのと、たまたま江西さん自身の手になる「わが自協史」が、パンフレットの形で△黒旗の下に▽第一号として白井新平さんの力で発行された。

「わが自協史」の内容は、大正十五年の全国労働組合自由連合会（全国自連）の結成前後から、新聞「反政運動」の発刊、自連第二回大会の流会そして続行大会での分裂さきわぎ、つづく日本労働組合自由連合協議会（日本自協）の結成、それに関連した各種労働争議（早川リーム・日本染織・東京ガス社外工など）昭和六年ごろまでの経緯をつづったものである。

それらはよくこれから書くこうとする内容と全く重

複する事項でもある。そこで運動史的な部面は△わが自協史▽に委ねて、本稿はその補記的な形で江西さんの動きに即してのみの記述にとどめることにした。△わが自協史▽とあわせてよんで頂きたい。（申込みは東京都文京区後楽二一七一五啓衆ビル4F・黒旗の下に発行所・送共三百円）

それからもうひとつ、前回(2)の末尾の章で、江西さんもまたいわゆる△リヤク▽をやったとうけとられる表現があり大へん迷惑をかけることになった。ここでまず江西さんの文章をのせ、おわびしておきたい。

(向井 孝)

『観念派の暴力とリヤクについて』

当時戦線内の観念派と実践派(注1)は地域的にも明

確に分離され、観念派はほとんどが山の地域。実践派

は本所・深川・南葛など労働街の下町に居を構えた。観念派は主として山の手方面に住する文士・作家・有名人を対象にリヤクで生活していた。菊池寛、芥川竜之介・広津和郎、その他特にひどいのは背髓カリエスで体にギブスをはめて長い病床に臥って、身動きも出来ない倉田百三―当時「出家とその弟子」が好評で、印税収入に目をつけた彼らは、常に数人が押しかけリヤクっていた。

彼らは皆、樗の棒に似たステッキをふり廻して脅迫した。また相手が実践派に属する場合は、ところかまわず暴行を加えた。ボルに転向したとして江東自由労働の大沼渉・山本勘助・高田格、とくに身体の大きい横山樸太郎などは、数名で徹底的な暴行をうけた。だがさすがに彼らも私や高橋光吉など、他の下町派・江東派の連中に対しては、言葉をかけないだけで、暴行を一度もしなかった。江西などは喧嘩に自信がないので、護身用として常に短刀を靴下の中にしのばせていた。

(註1) 観念派・実践派の呼称は、いわゆる△純正アナ▽と△サンジカ派▽という呼称と同じく、或る種の評価を含んでおり、現代の運動にまでその感情的対立を持込むおそれがあるのでここでは本稿では△自連▽派・△自協▽派という形で表現している。

深川富川町時代(2)―無軌道社―

当時富川町には坂野八郎・良三兄弟がいて、その前から△プロレタリア社▽をつくっていた。それに吉村大助(その親父が富川町で理髪屋をしていた)、岩植佐吉小岩の農家出身で、詩人タイプの青年だった)、阿部英男(唯一の妻帯者で、お茶の行商などしていた)、大阪の関西紡織から出てきた高川幸次郎・植田増吉、それから大阪以来の盟友高橋光吉(よく詩をかいていた)、など気のあうものが集って、△無軌道社▽を結成することになった。流行のルパンカを着て、深川のカフェーに入りびたり、グレン隊とやりあって高川が頭を割られるなど、みんな青春の無頼放埒の時代であった。

無軌道社は、雑誌△無軌道▽を刊行することになった。江西はその署名人になった。内容は、随筆や詩文、短い時事評論などで、活版刷B5版20/30頁位のもの。不定期的刊で四号ぐらいまで出したが、資金がつかずしてやんだ。

またこの無軌道社からパンフ△サバトラランド―山鹿泰治訳▽を出した。それについては後日談がある。江西らと親しかった機械技工組合の小沢一が、その後台湾に渡

った。そこで極秘裡に台湾黒色青年連盟をつくり、その第一歩として△サバトランド△を復刻発行したのである。

しかし台湾のきびしい植民地警察制度は、小沢たちの動きをすぐにキャッチした。小沢は治安維持法と秘密文書発行で、たちまち逮捕され、はげしい取調べのあげく、ついに獄死したのだった。

一方、江西は昭和三年末、自由労働で仕事へいく途中顔見知りの特高につかまって大平警察に拘留され、そこを出るとまた扇橋署へ別件逮捕されるということがあった。その別件とは△無軌道社△と△台湾黒連△を、サバトランドの発行で結びつけ、デッチあげようという意図だったことが、後から判ったのである。

さて、この深川富川町周辺には、無軌道社のほか、本所に拠点をおく△黒旗社△の山本忠平、大沼渉、歌川伸、高田格など江東自由の連中、佐藤十五郎、池田寅三、増田文二（彼はやがて軍隊にいき脱走した。そのため江西の周辺にも憲兵の搜索・張り込みがしつこく行われた。一年ほどのち逮捕されて、のち満州派遣軍として出兵したまま消息を絶った。その入隊中は、通称「一つ星の文二」昇格せずにいつまでも二等兵として勇名を馳せていた）などがいた。たがいに交流して、本所、深川、亀戸など労働者街の中心で活動をさかに行いいわゆる

た。総同盟だけでなく、かつて自連派に属した中立系組合にも、その傾向が顕著になってきた。そして普遍実施時期が近づくにつれ、そのための無産政党旗上げのうごきが活潑となった。

同年十二月一日、農民労働党結成大会が神田でひらかれたとき、アナキスト達は、期せず大挙して会場におしかけ、大会を泥乱におとし入れるということがあった。その農民労働党は即日結社禁止となったが、一方この日に結集したアナキスト諸団体の共同行動を契機として、相互交流が強まり、全国的な△連合体△結成の声が生れてきた。

こうして黒色青年連盟（黒連）は一九二六年一月三十一日、芝協調会館での第一回演説会——そしてその夜の△銀座事件△によって一躍新聞種となりはなばなく足した。もちろん江西らの△無軌道社△も最初から、その発起団体として名を列ねるものであった。（わが自協史参照）

この△黒連△の成立は、かねてアナ系労働組合の間でもすゝめられていた△全国連合△へのうごきを、一そう促進するものとなった。

一九二六年五月二五日、すでに地域連合をつくっていた関東・関西・中国・広島 of 四地方自由連合会（二三組

△下町アナ△と呼ばれていた。

江西は、当時一般化していたリヤクで生活をする気になれず、自由労働に出ていたが、それといてもアブレの不安がつきまとった。たまたま坂野良三が、その知人で、林町（富川町の向い側にある）にすむ村上仁助を江西に紹介してくれた。装飾業を経営する村上は、業界の変り者といわれた江戸っ子肌の一匹狼で、気前よく江西の身柄を引受けた。そして同家に移った江西は独身の村上の居候兼仕事の助手をやりながら活動をつづけたのである。

△黒連△と△自連△の発足

それよりすこしまえ、一九二五年三月、議会は政府提出の△普通選挙法案△と△治安維持法案△の二つを抱き合せて可決した。（この二つは、前者の労働者にとって甘い餌と思われたものが、何の足しにもならぬものであり、後者のムチが、社会運動にとってどれだけ致命的な打撃を与える敵の武器となったかを、その後の長い歴史のなかで教えるものとなった。）

しかし△普通選挙△の成立という甘そうなアメは、一きよに当時の労働者の視線を政治へとむかわせるものだった。

合）と北海道二組合からの代議員四百人は、浅草統一閣にあつまった。もちろん一三は、高橋光吉とともに東京一般労働組合に東支部の代議員として出席し、その成立のための一翼となった。

△日立亀戸事件など△

こうして△黒連△と△自連△はアナ陣営の二つの翼となり、前者は二六年四月より機関紙△黒色青年△を、後者もまた六月より月刊で△自由連合新聞△を発行しつつ、ともに相互がその役割と機能をもって緊密に連繫し、徐々に力を発揮しはじめた。それは例えば、その年におこった京成電車・日立亀戸、また浜松楽器などの大争議の応援活動として、大きく直ちにあらわれるものであった。

なかんずく、九月から十月にかけておこった日立亀戸の争議は、その後資本家たちに△黒連△△自連△の名を畏怖記憶せしめるものとして、世間の耳目をひいた。それは、はじめ東京機械技工組合の矢野義一の手引で、東京一般がその従業員組織を、日立亀戸工場につくったことに端を発した。ところが組合結成におどろいた会社側の度を越した弾圧は、まもなく争議発生となり、結成直後の自連は、あげてこれを支援することとなった。

その渦中で、やがて社長久原房之助宅放火事件、小平専務襲撃事件がおこり、宮崎晃（新聞連盟）高橋光吉・山一由喜（東京一般）古江直敏（東京自由）入江汎（沼津一般）その他が検挙され、世間の耳目をさわがせたのであった。

久原邸放火事件の経緯は、宮崎晃氏の手紙によると――『はじめ黒連で数回、資本家側に対する威嚇のビラを撒布した。（日立市の本社工場へもビラ撒きはやった）。しかしそれだけでは、資本家階級は打撃と感ぜないだろう。この際ある程度の直接行動が必要であると考え、独断で、大正十五年九月末頃の某夜、黒連の一部二〇名位が久原社長邸を襲撃。ビラ撒きのあと、玄関横、応接間に侵入、揮発油瓶を叩きつけ、マッチで放火、燃え上るのを見て引揚げた。当時誰と一しょだったのか記憶なく、ただ襲撃直前、正門侵入のとき武良二君がいたので、火をみたらすぐ引揚げるよう口早に告げ、武君がうなずくのをみて躍りこんだことは記憶している。

事件の翌々日ばくが警視庁へ引っぱられたとき、当時ばくが寝起きしていた下落合の「新聞労働連盟事務所」の斉藤君の姿をチラとみた。武君も引っぱられていた。ばくは放火罪で一番判決は五年？。控訴院経由大審院で昭和三年一月に三年の刑が確定した。刑の確定と同時に

ばくはのがれて中国江湾に渡支し、しばらくして帰る、また渡支して帰日、当時リクリュが来たばかりのときで、沈仲九は二人の娘を連れて日本經由ドイツに行き、呉養浩、盧剣波等がいて、景梅九が食事の心配をしてくれた。その後東京に潜み、昭和五年頃から、農村を主体にする革命運動を志向したのだった。結局、運動資金のことから昭和七年一月逮捕され、これは刑期六ヶ月で、前の放火罪三年をあわせ三年六ヶ月を小菅でつとめた。昭和十年九月小菅を出たとたん、その年の十二月長野警察に連行されて六ヶ月在監、長野地裁で治安維持法五年の判決。控訴判決で昭和十二年十月服罪、未決がなかったので通算があり小菅を出所したのが昭和十五年だった……』

△反政党運動▽発刊と除名

さて△黒連▽自連▽の発足当初は、ほとんど表面化しなかったが、もともと運動の内部には、アナルコサンジカリズム派（のちの自協派）と、いわゆる純正アナ派（のちの自協派に対する自連派）の二つのながれがあった。

しかしまた△黒連▽はアナキストの社会革命運動団体

であり、△自連▽が労組の連合組織であることからすれば、スペイン革命当時のAFIとCNTのような関係として、両者がそれぞれの立場と特徴をもつことで、相互がより有効的に活動を展開しうる形のものであった。

ところが江西の例でも明らかのように、彼は無軌道社として△黒連▽に加入し、東京一般に東支部として△自連▽に参加していた。このように多くの活動家はその双方に関係し、現実にはしばしば一本化して動くという傾向があった。それ故△労働組織▽として労働者の大衆組織△自連▽の中で、思想団体、革命団体としての論理が区分なく横行した。そして、運動方法の相違と立場によつての対立化が、やがてしげんに浮びあがってきたのであった。

その口火は一九二七年五月二〇日から二六日まで、中国漢口でひらかれた汎大洋労働組合会議の紛議によつて初まった。

問題はたちまちエスカレートして、組合主義者、階級闘争論者、サンジカリストへの批判弾劾がはじまり、ついに九月に至つて△黒連▽は、サンジカリスト派数名を除名するまで発展、結成一年あまりで、はやくも組織分裂のきざしをみせることとなった。

それよりすこし前、二七年六月、いわゆるアナルコ・

サンジカリスト派による、新聞△反政党運動▽が発刊された。同人は江西、山本忠平、横山樸太郎、難波正雄らで、江西はその署名人であり中心であった。

その発刊は、さきに実施された普選法による無産政党の簇出、福本和夫の△無産政党分離結合論▽の流行などもふくめて、労働者大衆がひとしく「革命より投票へ」と転換していく状況に対し、政党への幻想を打ちくたき、労働者自身の直接的経済行動を、あらためて、アナルコ・サンジカリストの立場から、強く訴えようとするものであった。また黒連及び自連の主流を占める人々からの批判に対して、△反政党▽を打ち出すことによつて、当時の状況におけるもつとも焦点的な問題によつて、自分らのアナキズムの立場を提示する意味がこめられていたとも云えるだろう。

新聞、大判二頁、二千部発行、平野力三がやっていた印刷所に頼み、江西は校正のため何度もそこへ通った。

記事は時事的なものの事件報導が主だったが、その主張、論説はほとんど山本忠平が書いた。

第一号は、黒連・自連の組織を通じて配布したが、たちまち全国から大きな反響がきて、2号から各地に支局がうまれた。また立売り宣伝隊がつくられるなど、はなばなしい出発であった。

しかし、八月に三号を出してまもなく「黒連」は機関紙「黒色青年」の紙上でつづけていたサンジカリズム批判、汎太平洋労組会議をめぐるサンジカリスト弾劾にあわせて、「反政運動」を狙上にあげて攻撃することになった。

その九月五日12号「日和見主義者共と袂別する辞」はつぎのようにかかれています。

『：彼らはアナキズムを生のまま労働者に与えるのは、強よすぎて集ってこない、と屁理窟づけて、「黒色青年」の水を割らないアナキズムを非難しながら、己れらの新聞「反政運動」を創刊したのであるが、その新聞の内容が、如何にボル新聞の模倣であり、如何にニセ者的であるかは、先月迄に三号を出した彼の新聞をよまれた諸君の痛感するところであろう。：即ち八月の集會に於て、彼らとキッパリ袂別してしまふことになり、彼らもそれを承認して連盟から脱退して往った。もうこれからは、わが黒色青年連盟は：彼らの弁証法的似非アナキズム、改良的日和見主義的サンジカリスト：とは絶対に關係はない。：』

あわせて黒連は、山本忠平、横山謙太郎、難波正雄、高橋光吉らと共に、江西一三の名をあげて、除名の声明を内外に発表した。

「反政運動」は、つづいて第四号を出したが、そのようなとき東京ローレル亀戸工場に働いていた、野末久三郎の首切りがきっかけとなって、争議が起った。

東京ローレルの労組は中立系で、自連傘下ではなかったが、東京一般江東支部と交流があった。しかも同志野末のことから起った争議である。その上にまた、「反政運動」にとって亀戸は、事務所の所在地で、運動の根拠地でもあった。江西らは、ただちに全力をあげてそのスト応援に突入した。そして、東京ローレル社長大谷米太郎が、両国国技館前で酒問屋をひらいていたので、大谷酒店を襲撃するなど、果敢に闘った。江西はこのとき高橋と共に捕えられ、国技館地下室で半殺しの目にあったのち、大平警察に争議が終るまで拘留されていた。（わが自協史13頁参照）

その間の空白や資金問題で、「反政運動」は、遂に廃刊となっていた。

「自連」第二回大会とその分裂

さて「黒連」のサンジカリスト派への攻撃はいよいよ激化しつつ、当然「自連」をもその渦中にまきこむものであった。

すなわち「汎太平洋労組会議」問題や、「反政運動」さらに江西らの黒連除名などを前ぶれとして、「自連」第二回大会ははじめから混乱が予想された。

一九二七年十一月一九・二〇日の二日間、浅草心光会館で開催された大会は、果せるかな議長を選出し議事に入ろうとするところで、思いもかけぬ問題によって大波乱となった。そして大会の論議はその問題に終始して日程時間のすべてを使い果した結果、翌年改めて続行大会をひらくという動議を決定して、流会同然の閉会となつてしまつたのである。

その思いもかけぬ問題とは、大会に出席した大阪合成労組の代議員（山中正及び中村房一）の取扱いという、いわば単純なことであつたが、その根にサンジカリズム是非のことがからんでいた。

この大阪合成労組（大阪戎警察署のならば十五メートルほどのところに事務所をおいていた）は、山中正、塩長五郎、白井新平らが設立し、当初からあきらかにサンジカリズムの路線をとるものであつた。

ところが関西自連内部の反サンジカの傾向や、運動方針の相違を理由に、大会の直前、関西自連からの脱退を申入れた。そして関西自連もまたそれに対して、規約綱領の違反として除名を声明したのである。

ところが同労組は、「関西自連からは脱退したが、全国自連からは脱退していない。いぜんとして、全国自連内のサンジカリスト派とは連合する」との方針で、代議員を大会へ送つてきたのであつた。

議事の冒頭で、関西自連は除名した大阪合成労組の退場を主張した。関西自連の平井貞二は、その代議員との同席を拒否して、壇上を降りず、大阪合成攻撃の論陣をはつた。

一方その出席を認めようとするサンジカリズム派は、延島英一をたてて反論、二日間にわたつてとめどもなく論争しつづけることになった。

江西はもちろん延島を支持した。しかしアナキスト組織のなかでなぜこのように除名が強固に主張されることになるのか、また大阪の紛議が東京の大会に持込まれ、大会のみんながまきこまれて、二日も浪費することの意味が、全く理解できなかった。そして平井ひとりがいやべりまくったことが長く記憶にのこつた以外、大会からえたものは失望だけであつた。

× × ×

第二回続行大会は、一九二八年三月一七・一八日に本郷教会館で開催された。だがそれは、もはや回避することが出来ないまでに対立を激化させたサンジカリズム

論議が、綱領改訂をめぐって爆発し、遂に組織分裂を決定的なものとする機会となるはなかった。

大会第二日、会場の混乱はいよいよはげしかった。黒連会員が代議員席へはいりこんでの野次などで、サンジカリズム派は殆ど発言不可能となった。

大会の勢力としては、対立する両派にはそれほどの大差はなかったが、このような状況では、もはや会議は無意味であった。また従来の「アミアン憲章」・「アナルコ・サンジカリズムの原理原則」にのっとった綱領が「我等は自由連合主義を以て労働者農民運動解放の基調にする」という抽象的な一項にしばらく改訂案では、到底、労働運動の現実をうごかしていくことはできない」と江西たちは判断した。こうして東京一般労組江東支部および南葛支部、東京自由労働組合、東京食糧労働組合の代議員は、ついに一せいで退場の挙に出た。

怒号と喊声のうちに、大会は残留組によって、新綱領案の可決、退場組の除名が行われ、こうして遂にアナ系労働運動は二つに分裂し、自連派と自協派が生れることになったのである。

△関東一般労組事務所▽

―柳島時代―

（略称・自協）が結成された。機関紙も「黒色労働新聞」△「労働者新聞」▽「黒旗の下に」と、順次発行され、関東一般を主力とした△「自協」の活動が漸次ひろがっていくことになる。

△データ補助のことなど▽

さて、その二年前の日立亀戸事件で刑をうけていた高橋光吉が、保釈で出てきて、江西と事務所に常駐することになった。早速、柳島の事務所の二階八畳の間をぶらぬいて、出所歓迎会がひらかれた。―といっても一升瓶をならべて、例のごとく気焰をあげての酒盛りで、やがて興に乗った山本忠平が、時永一郎を相手にして、ホトトギスの「武雄と浪子」をせり出した。

江西にしても高橋にしても、革命歌や労働歌は知っていても、かくし芸などというシャレた芸当のできない無骨ぞろい。それが生一本で運動一図の情熱家山本が、浪子に紛して

「武男がボートに移るとき、浪さん赤い腰巻を、おへその上まで巻くりあげ、コレに未練はないかいナ。△ソレに未練はあるけれど、お国の為じゃ是非もない。もしもガイセンのその時は、腰のぬけるまでしてあげる。ストトン、ストトン

江西が所属していた東京一般労組は、江東、南葛、北部、城南の四つの支部にわかれていた。そのうち江東と南葛の二支部は大会から退場したが、城南は自連に残留を宣言し、北部は態度を決せず中立的立場をとった。

江西の所属する東京一般の江東、そして山本忠平らの南葛支部は、組織を改め、自連脱退を共にした食糧労働輝曜労働組などとともに△「関東一般労働組合」を設立することになった。

一九二八年（昭和三年）秋には、その事務所を本所柳島につくって活動がはじまった。

事務所には江西が常駐した。その他小川一郎（芝浦労働）山一由喜夫（新潟一般から上京）なども父々寝泊りした。阿部英男、村田常次郎、坂野良三らも連日顔をみせた。東京一般北部支部の鶴岡直知、小川猛と親交が深まったのはこのころからだ。のちに水沼浩、阿久津久一、安田作蔵、亀山キノ、平出イクなども知合った。一方ではまた、自連残留組合のなから江西らの主張に共鳴するものたちの分離や独立―たとえば東京印刷工組合から△「東京印刷工連合会」▽（のちの関東出版産業労組）が分裂して出てきたように―提携組織がひろがってきた。

一九二九年六月、△「日本労働組合自由連合協議会」▽

と、やり出したから満場大喝采。やがて肩をくみ、抱きあって革命歌の大合唱である。―

しかし、いまおもえば、これが山本の最後のわかれのあいさつだったのかもしれない。この時ごろを境として、山本の姿は陣営から消えた。彼をはじめ歌川伸、大沼渉、高田格などの仲間が、やがてボルへと転向していくということが起ってきた。

東京自由労働関係の連中が、ほとんどボルへ移った一因は―これはのちに判ったことだったが―酒の座で山本の相手をした時永が、東京自由へオルグとしてもぐりこんだ共産党のキャップで、その手引きが大きく影響したということがある。

それにしても分裂後の△「自連」▽そして△「黒連」▽によって、しばしば△「自協派」▽は、さまざまな威迫や、転向阻止のための、みせしめの暴力に見舞われるということがあった。

それは、日々労働者と接しながら現場で、地道に運動をすすめようとする者にとって、いわれのない妨害であり、ひるがえってはアナ運動自体への見限りを作り出すものであった。その是非を問わず感情的に、かえってアナ陣営から仲間を追い出す結果となった。しかも追い出された彼らがなお一箇の運動者として労働現場にとどま

ろうとするかぎり、目前に無視しえぬものとして共産党の現実的な活動があった。とすればまた自己の生き方への誠実な選択としてそれへ投じていくことも、避けえない流れであったかもしれない。

△女郎の自由廃業▽

高橋を迎えた関東一般の事務所の運営は、江西、小川一郎、山一ら四人を中心の共同生活で維持されていた。交互に日雇労働で生活費をかせぎ、のこる者が組合活動にあたるという、その日その日が精一杯、みんな体当りで生きる生活だった。その他坂野兄弟、阿部英男、村田常次郎、野末兄弟、小川猛、鶴岡らが常連だった。

或る日、坂野良三が、相談をもちかけてきた。

そのころ、アナキストたちの間で、いわゆる遊廓などでの女郎・娼妓の△自由廃業▽が盛んであった。たとえ

ば――
「――一九二六・九・一四。娼妓運動に反対して全国の貸座敷業連合会代表が、廓清会・矯風会へ押しかけて威迫――」（岩波歴史年表）にもみられるように、盛り上ってきた当時の娼妓運動や自由廃業運動とも相呼応するものだった。

尤も自由廃業となると楼主にとっては、直接に金づる

を失うことになる。それで必ず暴力団をつかって、相手をおどし、つけねらって暴行を加えるなどの対抗策に出た。だから自由廃業をやるのには、相当のカクゴがいる仕事だった。

坂野はそれまでに何人かの「足抜き」をやった経験者であった。場所は甲府の穴桐遊廓で、山梨出身の男が女郎と夫婦約束をしていたが、どうにもならず頼んできた。万一のときひとりでは……というので江西に手助けを求めたのだった。

甲府につくと、坂野は慣れたもので、すぐ警察署へ乗りこんだ。二人とも筒袖に三尺おび、草履ばきといった当時の社会主義者スタイルで、署長に面会を申込み。

「女に自由廃業の意志があるので、楼主と交渉をしたい」そして有無を云わず、署長の立合いを求めて、女同伴で楼主の出頭命令を出させる。

法律では金銭貸借による人身拘束を禁止している。それをタテに、楼主に――借金は月賦で返済する――という書式をつくって判を捺させ、自由廃業をみとめさせた上で、その場で女を引取ってしまうのである。

もっとも楼主側は、こちらが警察を出たら最後、出入りのヤクザに頼んで女をとりかえそうとする。見つければ多勢に無勢、半ごろしは必定である。

坂野は談判がおわるとすぐ警察から人力車を呼ばせ、そのホロの中に女をかくした。それから駅とは反対の方角へとひた走った。その夜は山間の小さな温泉に一泊して、翌朝未明に、一つさきの駅から汽車にのりこみ、あ

つさり肩すかしして無事に女を連れて帰った。この経験から江西が学んだことのひとつは「法律は、自分が守勢のときは役に立たないし頼りになるものではない。しかしこちらが攻撃的に利用するとき武器にもなる」ということだった。

△暴力団高橋組▽

ところで、この関東一般の事務所は、借りるとすぐから、約束とちがうといって、家主が何とも立退きを迫っていた。所轄署も家主をうごかして追払おうとしていた。そこで、事務所には、いつも数人ががんばって、いつやってくるかしれぬ追い出しに対抗する必要があった。

ところが、皇族や政府要人が他府県などへ視察出張するとき、万一のことを予防するため、警察は要視察人となっている彼らを理由もなく事前検束して、もう大丈夫というまで釈放しないのが例であった。一方、彼らは情報をキャッチすると、すぐ所在をくらまして検束をのがれた。また争議などで、しばしば常駐の江西・高橋が

検束された。と代りの者がとまりこむ数日間、事務所は空白になった。

そのような――江西らの拘留中に、どうしても立のかないと見た家主は、警察とも相談して、暴力団に追い出しを頼みこんだのである。

浅草六区を縄張りとする暴力団高橋組が、無人の事務所に入侵して占拠した。いつも三人ばかりの若い男が留守居して見張っており、奪還できそうもない。ひそかに機を狙った江西、高橋、阿部、村田、野末兄弟らは、或る夜、手にコン棒をたずさえた地下足袋すがたで、一せいになぐりこみかけた。

江西が入口をけやぶると、屈強そうな男があわてて顔を出した。

「誰に断って、ここにいるんだ」と云うより早くコン棒が、男の頭上におちた。あつけなくつんのめった。

阿部が中央から立上ってくるやつを一撃。血が噴く頭をかかえてうつ伏せになる。他の一人は土間のスミにうずくまってしまった。

のこしてあった書類などをいそいでまとめ、高橋の無政府主義万才」とどなるのを合図に、大いそぎでみんな家の外へ出た。

警察がやってきたときは、もうみな散り散りになって、

姿をくりましたあとのまつりだった。

そのあと野末の兄は、亀戸署に捕まって二十日間の拘留をくらった。江西は、そのまま深川のドヤにもぐりこんで、うまく逃げのびた。一ヶ月あまりのち、或る朝早く、日雇いの労働に出るべく寄せ場へいく途中、つかまつた。

材木置場のかげに張り込んでいた顔見知りの特高三上刑事が、「久しぶりだねエ、お富さん」ととび出してきて、数人に取囲まれたのである。しかし、相手が暴力団のせいか起訴されず、二十九日間、本所大平警察署に拘留されただけだった。

ところが拘留あけで出たとたん、今度は扇橋署特高藤井刑事がまっていた。「ちょっと聞きたいことがある」そこでまたタイまわしの二九日間。検事によび出されて、さかんに秘密結社「台湾黒色青年連盟」のことについて調べられた。知らぬ存ぜぬでとうとう放免されたが、その時、取調べの検事から、或る日小沢一が獄死したことをきいたのだった。

△猿江V時代―関東一般事務所―

△闘いの日々V

柳島を追われた江西らは、やっとのことで今度は深川

区の猿江に家をつつけて借りた。

市電が水天宮交叉点から北進して、隅田川にかかる深川新大橋を渡ると、深川区内にはいる。その終点が猿江で、深川区の北辺にあたる。それをさらに北へとついで亀戸・小松川、西に接続して本所区という風に、周辺一帯は労働者街である。

事務所は猿江終点から南へ約百メートルほどで右折した横町の二階建て、周辺に電紐工場などが建てこみ、隣接の早川リーム工場の研磨の騒音が、二階にそのまゝ反響してきた。

この猿江の事務所はそのすこしまえ大阪から上京してきた白井新平と、後を追ってきた妻の政子、まだ三つ四つの子供だった凡平ら家族が住み込み、二階は江西・高橋それと九州から出てきた田所茂雄や坂本孝雄らが交互に寝泊りした。

白井夫人の政子は、大阪新世界で△反政党運動Vの立売りをやったこともあり、まだうら若い女性ながら、やってくる扇橋署や警視庁特高との応待を事務所の留守役としてきばきやつのける頼もしい同志だった。

さて関東一般は、事務所をこの猿江に移してから下町一帯の労働者たちとの接触が、しぜんとひろがっていった。

職場の問題や苦情の相談、組合づくりのための工場有志との連絡、秘密の相談会などが頻繁にもたれるようになった。また紛争やスト発生と聞くと、どんなところでも、すぐ応援にかけつけた。

猿江に移ってまもなくの争議は、浅草六区映画館弁士のストであった。当時、無声だった映画のトーキー化がようやくすすみ、いわゆる活弁たちは急速に職場を失いつつあった。それを支援して、館主に団交を迫るため、上映中の映画館のくらやみで、突如「蛇ダァー」とわめきちらして映画を中止させ、新聞種になったりした。

一九三〇年十月、早川リーム工場に争議がおこった（わが自協史14頁参照）。そこは従業員四十人ほどの小工場だったが、江西らは全力をあげてこのストを支援し闘争を展開した。いわば隣組ともいふべき地許のことであり、さらにその労働者と日頃から緊密な連絡がとれていて、関東一般はその面子にかけても負けられなかった。

自協系の組織も応援に立ち、大阪からは平井貞二・橋田倉之助（関西黒旗連盟）や、名古屋の後藤広数（中部黒色一般）らも来援して、めざましく活動した。（平井はそのごも滞在して、つづく内外興業―ヤナセ自動車―の争議で逮捕され、器物損壊で三ヶ月入獄した）

争議は警察の執拗な介入、争議団ぶちこわしのための威迫、はては江西らの逮捕と長期拘留にもかかわらず、短期決戦戦術が効を奏して、諸要求の殆どを獲得して終結した。当時の争議が全くといってよいほど敗北するなかで、この勝利は大きく自協系の同志をふるいたたせ、関東一般の組織拡大にもつながった。

△北部支部と日本染絨V

早川リーム争議の支援などが作用して、東京一般北部支部との関係は、より密接になった。

東京一般北部支部は、さきの自連分裂大会では、中立的立場をとって自連組織に残留していたが、労働運動との遊離傾向が甚しくなるにつれ、自協系へと近づくことになった。

そして自協系組織の戦線整理と進展につれ一九二九年七月、関東一般北部支部として活動しはじめることになった。

この統一の機運を盛りあげたのは、北部支部の常任、小川猛と鶴岡直知だった。鶴岡は絵をかいていたが、江西にオルグされて運動に入ってきた。小川はすこしどもりだった。警視庁内で調べられていたとき、特高に鉄製灰皿を投げつけたことで一躍有名になった。東京ガス社

外工争議の討議で、城南支部（自連派）の金沢の頭をノコギリでゴシゴシやったという直情径行の闘士だったが、小柄でおとなしい鶴岡とよく気が合い、鶴岡を女房役とした名コンビで北支部をもちたてていた。

北支部の事務所は南千住、橋端にあった。江西らは電車賃を節約して、歩いてよく北支部をたずねた。

そのような状況を反映して、当時、新劇運動がさかんであった。土方与志を中心に築地小劇場がつくられ、そこで山本安英、高橋豊子、細川ちか子らの左翼劇場が常打ちで公演をしていた。アナ系劇団として△解放劇場▽が誕生して、飯田豊二などを中心に上演活動をはじめていた。

常時上演された藤森成吉の「何が彼女をそうさせたか」は労働者の間で評判になった。また徳永直の共同印刷ストを扱った「大陽のない町」なども、働く人々の共感をよんだ。そして職場の労働者は挙って観劇に出かけた。

北部支部に所属する関東一般日本染絨分会も団体観劇会を組んで、築地へ見に行った。江西も高橋、小川、鶴岡らと共に出ていった。その時、江西は鶴岡に、日本染絨に働く亀山キノを紹介されたのであった。

その日の舞台の小間使いをしていたヒロインが、いろ

んな体験をして社会の矛盾を知るようになり、遂に教会に放火して「もっともつと炎えろ、まっ赤になって炎え上れ」と絶叫しながら下手へ駆けこむ幕切れのシーンは印象的でいつまでも忘れられなかった。そして江西にはふとその主人公が、亀山キノのような錯覚にとらわれるのだった。

彼女は二十二・三ぐらいにみえ、束髪でおしろい気のない顔やそぶりに、勝気でひたむきな気性がよくあらわれていた。

それからち、気付いてみると同じ職場の同僚の平出イク（丸顔で誰にも愛嬌がよかった）と一しょに、いつもいろんな会合によく出て来ていて、ふと眼があうことを意識するようになった。それは江西にとっては、生涯に一度だけの淡く、それゆえ忘れられぬ恋のはじめであった。

真夏のある日、猿江の事務所所に江西がひとりいると、ふらりと単身で彼女が訪ねてきた。とりみだしたのは江西の方だった。

「これからしっかり勉強したい」という彼女に、金子ふみ子の獄中記をよむことをすすめ、職場の事情などきいたりしながら、いつのまにか時間がたっていた。

もう家へ帰るといって彼女を送ることにして、途中浅草

の六区をとり、上野公園から自宅のある三河島まで並んで歩いた。その数時間のあいだの——特別な感情を持った異性と二人っきりで歩いたのは、ただ闘争にあけくれて過してきた江西にとっては初めての経験であった。といて手や肩がふれあったというのでもなく、もとより運動以外のはなしをきり出すことも知らず、やがて彼女の家が見えるところまでくると、わかれをつげた。

そのご江西には彼女と再びゆっくり話合ふときもなかった。ただ一回、大光硝子争議のとき、目黒の争議団に彼女が訪ねてきたことがあった。江西は彼女と立話程度の会話を交して別れたのであった——

そうこうするうちに一九三一年（昭和六年）四月、彼女たちの働く日本染絨に争議が起ったのである。（この争議については△わが自協史▽15頁参照）——

この争議の大きな特徴は、何よりも創造的な——それゆえ後にまで大きな影響を与えた闘争方法を闘ったということだろう。第一に餓死同盟というハンスト戦術をもって、二十四日間工場占拠を行い、勝利の基礎を確保した。（このことから、その後各地の争議にハンスト戦術があらわれるようになった）

第二に、△煙突周▽の出現によるキャンペーン。（これは応援にきていた千葉浩（関東印刷出版）が独自の判

断で、梅干・カツオ節・握り飯数食分をもって、炎天下身をかくす所もない高空で七二時間ねばり、その生存問題が世上をわきたたせた。彼を引きおろすとき、衰弱して動けず、三井埠頭の組合員が上り、ロープにモッコをつけてその中に入れてようやくおろした。）

第三に、日染婦人部のめざましい活動である。兵站部、救護班、家族慰問班、ビラ貼り。デモのレポーター。行商隊。重役宅への坐り込み行動など、大きな役割を遂行した。

この婦人部の中心にあつて、もっとも活躍したのは、亀山キノであり、それを助けた平出イクであった。彼女らの行動は、男子工具はわろか、自協から応援にきた仲間たちをもふるいたたせ、持久戦を勝利へとみちびくものとなった。

△北部消費組合▽

この日染ストと前後して、△北部消費組合▽が生れた。日染婦人部の行商活動と経験はまた、この消費組合への積極的な参加とその組織確立へとつながるものであった。もともとこの地域は、大正九年、生協運動の先駆者岡本利吉と、純労働組合の同志平沢計七（関東大震災・亀戸事件虐殺）の提携によってつくられた労働者消費組合

の先願（共働社）発祥の地でもあった。関東一般の仲間村田常次郎はその共働社時代からの活動家で、震災時、平沢と共に銃剣で刺突され、死んだと思われて堤防に捨てられたのが蘇生して、奇蹟的に逃げることでできた唯一の生存者でもあった。

北部消費組合は、村田の助言と協力、近所にすんでいた水沼一家一浩などの応援で、白井新平を専従者にして、直接生産地から品物を仕入れて、日用品から米の配達までやりはじめた。はじめは日本染織の労働者を中心に、一部の組合員家庭が対象だったが、次第にひろがって亀戸、江東まで組合員が出来てきた。

この消費組合の拡大とともにまた、労働者の関東一般への組織化もすすみ、両組合が相互に力となりながら、併行してともに活動をつづけることになった。そして、その後の社会状況のファッショ化、労働運動へ弾圧の嵐が吹きすさぶとき、消費組合は、わずかに活動を維持する最後の拠点となったのである。

× × × × ×

亀戸事件で虐殺された平沢計七—といえは昭和六年三月、大光硝子が争議突入直前にあったことである。ある夜、某所にあつまって、職場の労働者数人と、関東一般からは江西・高橋・田所・阿部が加わって、争議

の準備について討議をかわしていた。

その最中、とつぜん入口でサーベルや靴の音が入りまじってきこえ、瞬間、制服巡査数名が泥靴のままふみ込んできた。

「秘密の会合は許さん。全員総検束だ」とどなりながら指揮をとっていたのか、亀戸署の特高部長北見であった。そしてこの北見こそ関東大震災のとき、平沢計七・河合義虎らを逮捕して虐殺せしめたあの亀戸事件の張本人だった。

亀戸署に連行されて、全員が口々にその不当検束を怒鳴っているとき、高橋がとつぜん大声で北見を指さして、叫びだした。

「こいつだ。こいつの顔をオレはおぼえているぞ。こいつが平沢らを殺した亀戸事件の張本人の北見だ。きみらは村田の体をみただろう。あの銃剣で刺された一ぱいの傷痕を。こいつが村田の体を傷だらけにしたのだ。こいつのツラを忘れるな」

江西らは、北見に対して徹底的に抵抗し、正当な裁判を要求して即刻ハンストにはいった。そして四十八時間后には全員を釈放させたのだった。

△ガス社外工△争議の惨敗

一九三一年七月、深川和倉町の雨宮製作所で争議がおこった。この争議では検査者延人員が六一〇名になるという程に、警察の介入がはなはだしく、官憲との乱闘事件が何回かもちあがった。江西はその都度たくみに逮捕をのがれたが、それだけになおさら目をつけられて追求された。

争議が終ったとき、仲間たちは、「こんどつかまると長いだろうから、一そ大阪へ帰って……」とすすめた。江西自身も疲れきったような感じで、毎日の活動が時にふつと空しい気がすることもあった。しかし勿論、大阪へ帰る気はなかった。

そうこうするうちに、一九三二年七月、東京ガス社外工争議がおこった。

当時、東京ガスは巧妙な下請制度をとり、下請業者十数社が社会工と雇傭関係をむすんでいた。しかもこれら下請業者の大半は暴力団で、低条件下の酷使労働が常に行われていた。そして、この下請組のなかのまとめ役ともいべき実力者、関東一円に勢力をもつ芝区芝園橋の暴力団赤羽組の組長赤羽隆次が全体をとりしきっていた。

七月二日、東京ガス下請の篠原商会社外工約五十名自連系東京ガス工組合城南支部が、暴力団赤羽組によって組合脱退を強制され、その強喝をきけて千葉方面に引

上げてストにはいった。またそれに呼応して横山・日高ほか各商会社外工が同情ストに入り、その他にも同情サボがひろがった。そして全社外工のうち約半数がストに参加して、暴力的労働条件改善と請負単価引上げを要求して立上ったのである。

しかし争議団の交渉相手東京ガスは、下請業者の問題であるとして逃げ、しかも下請商會は、もっぱら赤羽組の意向に左右されるという始末だった。

このようにして争議は行詰り状態となり、その支援態勢にはいった△自協△も、手の打ちようがなかった。

その状況を打開するには、赤羽組と話をつける以外にないと判断した江西は、盟友坂野良三と二人で、赤羽組にのりこむ決心をした。

黒色青年連盟・無軌道社の名刺を出して、親分に面会を求めると、座敷へ通されたが、左右に若い者二人ずゝを従えて、五十才ぐらいの赤ら顔の男が正面にあぐらをかいている。

「このままでいけば、我々も△黒連△の名にかけて、徹底的に争うことになるだろう。争議の拡大は双方にとって共にプラスではない。折れ合う線を出すことが解決への道である。」

「こういう風になったのは社外工がストをやりました

からである。争議団の方から折れねば事態の進展はのぞめない。」

という主張の併行線で、一時間ばかり押問答がつづいた。

途中、声高になると、襖の外で殺気立つ男たちの気配が何どもした。結局、どうどうめぐりのまま話わかれとなり兇犯どもの人垣の中を二人はおしのけて帰ってきたのだった。

七月二十五日未明、争議団は東京ガス社長岩崎清七邸に一大デモをかけたが、そこで百余名が検束された。つづいて争議団本部も強襲され、暴力団対抗用竹槍五十本、棍棒・小石メツプシを奪われて、団員二十名が逮捕されるに至った。

そして下請業者の暴力的脅迫の横行、さらに親企業の本工東京ガス従業員組合の争議団への積極的応援の躊躇と混乱などから、争議は長期化のなかでおのずと敗北の色をこくしていった。

この争議支援に全力投球して闘ってきた自協は、さきの日本染絨争議での△煙突戦術▽が大きく与論をおこし、スト早期解決の支えとなった経験から、ガスタンク占拠をもつて一挙に局面展開をはかり、争議団を鼓舞することを決定、直ちに実行することとなった。

八月二日、田所茂雄（関東一般）宮崎静三（関東出版）坂本孝雄（関東金属）ほか社外工など、六名の決死隊が、警備のすきをつき夜蔭に乗じて、深川ガス工場のタンク八〇メートルの高空に登りだした。そして追尾してのぼってくる警備員には木製のニセピストルで追いついて占拠を完了したのだった。

しかしその翌日三日は、自協本部及び所属組合が一斉に官憲におそわれ、十余名が検束されるという徹底した弾圧ぶりだ、この日から争議団主脳部で残っていたものは、全部地下に潜らねばならなくなった。

一方、タンクに昇った六名は、八月の炎天下、日影ひとつなく、じりじりと灼けつくタンク鉄板の上で、下からの連絡もなく、水が一滴もなく、食糧が絶えて衰弱ききって、六日目、八月七日ついに刀折れ矢尽き、扇橋署官憲數十名によって引き降されたのであった。（このガスタンク占拠戦術は、日染の煙突戦術と同様に全労働戦線に大きなショックを与え、各方面からの支援や見舞がよせられた。その時、激励にやってきた総同盟青年部長が、現在江西と組織を共にする総評全国一般中央本部執行委員長大門義雄その人であるのも何かの奇縁と云うべきかもしれない）

さて争議団を追打つように八月八日再度の争議団総検

束が行われほとんどのメンバーを失った。しかしこのつた家族によって八月二六日家族団がつくられ、家族団独自で東京ガス本社へデモをかけた。つづいて三十一日は家族団が警視庁にデモをして嘆願書を出した。九月八日は家族団、のこった争議団全員、応援団体により、三たびガス本社にデモをかけたが、そこでまた十六名が検束され、事態は悪化するばかりであった。

かくて九月十五日争議は惨敗に終り、百十余名解雇、手当二千八百円という、屈辱的条件をのんで、ついに収拾することになったのである。

△帰 阪▽

社外工争議の惨敗と弾圧は、江西の身心をつよくうちのめした。そして小松川にあった坂野夫婦の家で世話になり、毎日土手の下を犬をつれて散歩しながら、来し方行方をなんども考えて悩んだ。

当時、ようやく自連と自協の両派のあいだでは分裂抗争が停止し、合同統一の気運が生れはじめていた。が時すでにおそく、一切の社会主義運動・労働運動は、手がかね品をかえての弾圧取締りによって、潰滅化の途をたどる一方、軍国主義とファッショ化の流れは世を蔽って

流れ出していた。

江西は、さんざん思いあぐねたあげく、ともかく大阪へかえろうと決心したのは、その年も末のことであった。しかし帰るといっても、十年前、すべてをすてて出奔してきた経緯を思えば、もはや落付く先もないのである。

昭和八年はじめ、大阪へ帰った江西は、逸見吉三をまず訪ねた。ちょうど、北刑務所在獄中の小西次郎に面会にいくというので、同行することにした。差入れの金の工面に、久保田鉄工所の牛尾工場長（現社長）のところに寄り、すこしの金をもらった。

面会に出てきた小西とは初対面であった。これがあのギロチン社で世をさわがした男かとおもえぬほど、おだやかで静かな青年であった。

それからしばらく、逸見のところであらうらわしていたが、どうしようもない。

ついに思いきって弟たちの家をたずねた。まさに△父帰る▽の心境であった。

弟たちの家の方は、義理の甥にあたる佐々木貞次が、呼鈴や小物スイッチの自家製造業をやっていた。幸い人手がいたので、早速それを手伝うことになり、そこでようやく落付いた大阪生活がはじまったのである。（この稿了り）

△付 記▽

江西は、その後、佐々木の工場でおぼえた仕上げの技術を利用して、徴用のがれのため大阪製罐の前身千代田製作所（西淀川区福田）の電気小物仕上工にはいり、敗戦まで働く。

そして戦后設立された日本労働組合会議の第二回大会で、書記長相沢尚夫にひっぱり出され、組織部長として戦后混乱時の一番くるしいなかを東奔西走する。

ついで△日労▽が、新しく結成された総評に吸収合併

あとがき

☆イオムの原稿が多くあつまり、今号は増ページとしたこと、その

ごと自体は結構なのだが、前号・今号とも過去の運動をのぞきこむという傾向がつよく（過去の運動を今日に生きる主体として取りあげる、その主体がよわく）、アナキズム運動の文書資料館の回廊をうろついているような、ある種の気恥かしさを感じる。この問題を検討してほしいと思う。ぼく自身も考える。（不満分子）

☆観念が日常的感性かということ、どうしても観念が優先されがちです。しかし日常の中からこそ、思想の論理と実践が生まれてくるし、個人と個人の信頼関係もよ

されると、大阪総評内で産業別のワク組からはずれた中、小企業組合をまとめて、全国一般の組織をつくるための活動をつづける。そしてその後一貫してその組織部長として働きつづけ、今なお現役で労働運動のなかにその身をおくことになるのである。これらについては、機をみて江西自身の貴重な記録があらためてまとめられる筈である。

さいごに、本稿が非常に粗っぽい記述となり、部分によって内容に密粗があつて不十分なものとなったことを、江西氏及び読者におわびする。（向井 孝）

り強く現われてくると思います。（コパトーン）

☆原稿が多く集まり、いくつかは次号にゆずった。60頁に収めようと苦心、体裁を度外視した。河本さんから神戸の銀行名について調査依頼あるも多忙の名目で未調査のまま掲載した。いずれの場合もご了解を願いたい。編集スタッフのために「あとがき」一頁を予定したが、それもオジャン。さて、イオムも6号をもって一年半、同志諸氏の支援のお蔭と感謝。ところで、最近のイオムについて不満が出始めた。それが、次号にどのような形で表われるか。（前）